

あかしん

総合印刷物企画・プランニング・デザイン・印刷・加工・オンデマンドデジタル印刷・デジタルメディア企画制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社 新聞ビル

元気のでてくる“ことばたち”

162

村上信夫



Nobuo Murakami

してやる』『震災の福島を、言葉で埋め尽くしてやる。コンドハ負ケネエゾ』それは、悲痛な叫び声だ。直接五臓六腑に働きかけるような言葉たちだ。

自分を表現したいという気持ちはもともと強かった。詩のゼミを専攻していたことがきっかけで、小説家の井上光晴さんの講座に参加できた。井上さんはすごいオーラを出していた。自分の詩に自信がなく、思わず「これは詩なんだろうか」とたずねると、「これは詩だよ」と力強く答えて

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』『鎌田實いのちの対話』案内役など、NHKラジオの「声」として活躍。この4月から、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をする予定。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『ラジオが好き!』（海竜社）『ことばのビタミン』（近代文芸社）『いのちの対話（共著）』（集英社）など。

ほとんどなかったのに、急に読むようになった。自作の詩を書いたら当然、読んでもらいたい。コピーをしてホットキス止めて、300冊くらいを大学生協に置いたり、本屋に売りに行つたこともある。無謀なことを平気でしていた。

高校の国語教師になつてからも、同人誌へ投稿しながら、10年間コツコツと書いた。

その積み重ねが、中原中也賞の受賞につながる。

福島県で生まれ育つて、一度も出たことがない。大学の恩師に「詩人は自分の環境を変えるくらいの力を持つべき」と言われ、自分が生まれ育つて、ここで住んでいくしかない福島をどう変えていくかという考えを持つに至った。

福島をあきらめない

震災、津波、そして原発事故。1年経つても、福島が受けたダメージはぬぐえない。

「よくよく考えると、状況は3月11日から何も解決されていない。原発は今も放射能を出し続けている。でもそれを受けとめる土壌がない。悲しみ、絶望の「次」を考えることができない。ふたをして、時間の流れに任せて過去のものにしていくような印象がある。」「福島はもう終わりだ、崩壊する」ということから生じた距離感。どうがんばったって元の状態には戻せない

福島から叫ぶ

福島から叫び続けている男がいる。詩人、和合亮一さんだ。

1998年にデビュー作で中原中也賞を受賞。以来、現代詩を牽引する立場として幅広く活動してきた。いわかに注目をあびたのは、東日本大震災。福島市内に住む和合さんはTwitterで詩を発信。多くの反響を呼んだ。それらをまとめた『詩の礫』『詩ノ黙礼』『詩の邂逅』の3部作からは、和合さんの心の動きが見てとれる。

和合さんが、Twitterで詩というより「つぶやき」を発信しはじめたのは、被災6日目からだ。その「つぶやき」は、今読んでも、心を揺り動かされる。「そのときは世界の終わりだと思っていた。家族は避難し、水も出ない状況で、ときに泣きながら書いていた。自分が生きていた跡を残したいという衝動から湧き上がる言葉を発信していた」。すると、フォロワーがどんどん増えていった。現在21,000人を超えている。『福島をかえせ!』『放射能をぶっ潰

福島を言葉で埋め尽くす

詩人 和合亮一さん

福島で書く

和合さんは、1968年福島市生まれ。ぜんそくを患っていたので、学校も休みがちで引つ込み思考で、おとなしかった。

中学の頃、自分だけのラジオ番組を作っていたことがあった。カセットデッキを音楽用と収録用2台使い、ニュースやドラマ、語学番組などを自分で構成を立てて原稿を書いた。自分で声色を変えて長島茂雄やお隣の友達の上君の犬にインタビューしたり…。おまじめに作った。それを両親は仕事から帰ると必ず聞いて、楽しんでくれた。それが嬉しくて、もつと作った。和合さんの表現手段の原点がここにある。大学に入ってから、詩と出会った。



俳画/イネ・セイミ

インディアンフルート教室
開講しました。
誰でも気軽に吹けます。楽しく個人レッスンを受付中!!

何か始めたいと思ってる貴女へ、数年後、素敵にフルートを奏でる姿がここにありません。

講師 **イネ・セイミ**
(フルート奏者 指導歴30年)
1レッスン・1時間5,000円(チャイムタイム付)
申込み 0569-89-7127
お問合せ seimine@oasis.ocn.ne.jp

俳画教室開講中
ところ 常滑屋
とき 月二回 第二・第四金曜日
午後一時〜三時
会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三三)〇四七〇

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

ラジオが好き!

村上信夫

好評発売中

という大きな絶望とあきらめの距離感が生まれた。でも時がたつにつれて、ずっと町づくりの活動をして福島で生きていくと言ってきた立場として、最後まであきらめないという気持ちに変わってきた。

ことばには力がある。「自分は詩人として、ことばの力を信じて活動するのみだ」。

和合さんの近作に『青空に』という詩がある。その詩は、

福島の青空に風
うん 生きていく
私もあなたも
うん 涙を拭いて
と結ばれている。

「うん」という短い言葉の中に、気持ちの切り替える決意だという短絡なものではない様々な「想い」が去来する。

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (13) 岡田 清治

結婚

前島は喫茶店の時計が午後一時五分前を指すのを見て、店を出た。社内に戻ったら取引先からの電話に追われた。ようやく一段落したので、「東京のM社に呼ばれていますので、早目に出ます」と、課長に告げた。

「そうか。M社の方によく伝えてくれ」

課長は深くは聞かなかったが、前島は内心ほっとした。

課内の社員は鉄砲玉のようなもので、直帰する者も多く、会社の定刻に席にいないのが少なかった。また、相手の都合に合わせて直行、あるいは出張で全員が揃うのは月に二度の定例会議の時ぐらいだった。だから私用で早退に社を出ることをためらうことはなかった。ただ、報告は頻りにしないと、小言を言われる。

前島は約束の時間より早目に行つて帝国ホテルのロビーでM社の担当者に出会って改め、直帰する了解をとった。

日比谷公園に面する帝国ホテルは、地の利が良いので、ここで待ち合せする人が多い。約束の時間までロビーの椅子にかけて夕刊を扱って待っていると、山根が前島の肩をたたいた。

「すみません。待たしましたか」

「いえ、先ほど着いたところです」

「本日はよろしく。ホテルの上の和食のレストランに部屋を取っています。坂上さんは直接そちらに来られることになっていま

「いろいろなお世話になります」

「気楽にやってください。坂上さんもお酒はいけると伺っています」

「そうですか。アルコールが入れば気が楽ですが、しゃべり過ぎて嫌われるかも…」

二人はエレベーターで十七階まで上った。

和風割烹Nの暖簾をくぐった。入口で予約を確認すると、すぐ和服姿の若い女性が部屋に案内した。まだ、坂上恵美の姿はなかった。山根は背広の袖を軽く上げて腕時計をちらっと見た。

「約束の時間まで数分あります」

「そうですか。会社を定時に抜けるのも苦労ですから、多少、遅れてもかまいませんよ」

「前島さんは優しいですね」

「どうですか。民間企業で定時で仕事を終えることはできません。ある程度サービス残業になります。このため、集中してテキパキ片づけて終わったら『さようなら』と言って帰りたいのですが…。大企業は給料がいいと言いますが、時間給にしたら中小企業並みです。山根さん、どう思われます」

「そうですね。私なんか出張が多いですから、いくら長時間働いても手当て処理されてしまいますから、時間給では考えられないですね」

「そうですね。その点欧米のサラリーマンはきちんとルール化しているようですよ。まあ、限定的です」

「ただ、マネージャークラスは日本人以上に猛烈に働くと言います」

二人が雑談していると、案内された坂上恵美がグレーのツイードにハンドバッグを肩にかけ、首には淡いブルーのスカーフを巻いて現れた。いかにもキャリアウーマンと思わせる颯爽とした姿を見せていた。

「遅くなりました」

「いえいえ、われわれも先ほど着いたばかりです。お忙しいところ、すみませんでした。こちらお話ししました前島保さんです」

「坂上です。はじめまして」

「前島です。よろしく」

坂上は二人を前にして、テーブルに敷かれたシックな濃紺色のランチョンマットの席についた。

「はじめになにか、お飲物されますか」

「係りの女性が三人に尋ねた。」

「ビール、いかがですか。坂上さん、飲まれますよね」

「はい、いただきます」



聖ポール天主堂(マカオ) (著者撮影)

「それでは瓶ビール、本お願いします」

「まあなくビールが運ばれ、係の女性が坂上恵美のグラスに注いだ。坂上はグラスをやや斜めに傾けて程よいところで、グラスを縦にした。次に前島、山根のグラスにも注いだ。」

「それでは、杯を上げましょう」

「乾杯」

「コース懐石ですので、どうぞ、ごゆっくり召しあがってください」

「いただきます」

三人は箸を取つて前菜から手をつけ、口に運んだ。

「坂上さんはどういうお仕事をされているのですか」

山根が口火を切った。

「繊維の貿易部門にいます。もともとうちの繊維は大阪本社に本部があったのですが、一九五〇年代から日米繊維摩擦が起こり、例の沖繩返還の見返りに、一九七二年に繊維輸出規制が行われ、日本の繊維産業は壊滅的な打撃を受けました。それで貿易と言いつても、ほとんどがアパレルの輸入の仕事です」

「そうですか。アパレル業界の変化も激しいようですね」

山根が相槌を打つた後、前島が引き取った。

「ユージーに繊維業界もありましたので、興味がありました」

「私は以前企業の売上規模の変遷を調べたことがあります。売上上位一〇〇社の変遷を見ますと、繊維産業が黄金時代の昭和八年(一九三三)には二十七社が入っており、その中の十一社が一位から五十位までランクされていました。」

戦時中の昭和十八年(一九四三)の二期、十五社に減ります

が、戦後の昭和二十五年(一九五〇)の朝鮮動乱を機に再び盛り返し、二十社が名を連ねました。そして昭和三十五年(一九六〇)には旧化繊維七社と旧紡績十社すべてが二〇位以内にランクされていました。その後、高度経済成長の終期となった昭和四十七年(一九七二)には、合繊六社と紡績二社が辛うじて踏みとどまったものの、その後は合繊三社、紡績一社が中下位以下です。」

前島は主な業界を調査した時のことを思い出して、少しでも坂上恵美と知識を共有することで、近づこうと、業界の推移をかいつまんで話した。

「お詳しいですね。今は繊維企業も非繊維分野に力を入れていまして、あらゆるものを手がけています。売上も繊維部門を上まわってきています。このため商社での繊維部門の地位も下降の一方です」

「そうですね。鉄鋼とか、半導体関係の分野が伸びているでしょうね」

山根が受け答えしながら坂上と前島のグラスにビールを注いだ。

「ありがとうございます。これからはコンピュータや半導体の時代だと思えます。ただ、アパレルは主に輸入ですが伸びています」

「そうですね。坂上はビール瓶を取って山根に注ぎ、前島がグラスを空けるのを待って注いだ。」

三人は二杯目になると、話が徐々に弾みだした。料理の方は係の女性が頃合いを見計らってタイミングよく運んできた。あまり速からず遅からず、しかも料理が冷めない内に運ぶには、よほど訓練をされていると難しい。

「ワイン、いかがですか」

「いいですか」

「フランスボルドーのシャトーラグランジュ赤ワイン、ボトルでお願いします。これはお得意さまから教えられたのですが、結構うまいですよ」

「それ、サントリーがフランスボルドーのシャトーを買収して経営しているところのですね。今では高級ワインの仲間入りを果たされました」

「よくご存知ですね。そういう方に飲んでいただくとうれしいですね」

「ワインに多少、興味を持っています」

坂上はワインについて蘊蓄を傾けた。

「フランスのワインの名産地はボルドーのほかにブルゴーニュなど七地方があります。さらにボルドーは、メドック、グラヴ、ソーテルヌ、サンテミリオン、ボムロール、フロンサク、アントル・ドゥー・メールの七地区にわけられます。」

「ぶどうの樹は実に繊細です。同じボルドーでも土壌の組成、高低日当たりのわずかな角度、つまり斜面か平地かといった組み合わせで、その土壌に適する品種が異なるのです。」

ボルドー七地区の最高級の一つがメドック地区で、その中に約七十の村があります。その村の中で最高の村がマルゴ、サンジュリアス、ボイヤック、サンステーフの四つです。ワインボトルのラベルを見て、メドックのどの村のシャトーかを確認できれば、上等かどうか、判断できます。」

「いや、ワインは難しいですね」

「本当に、そう思います。安政二年(一八五五)のパリ万博の年、ナポレオン三世の命令によってボルドー地方の最高のワインを選び出すことを目的にグランクリュ(特級の格付けが行われ

「この格付けは変わらないのですか」

「今後もそう変わることがないと思います。ただ、経営を怠るとたとえ第二級のシャトーでも、そのワイン価格は三級並みに扱われることがあります」

「格付けは絶対的なものなんですか」

「格付けに入っていないシャトーからは、格付けにあぐらをかいていると反発の声も上がっています」

「実際にすごいワインもあるのでしょうか」

「そうですね。ボムロール地区の『ペトリュース』(赤ワインはブルゴーニュの幻の銘酒といわれる『ロマネ・コンティ』(赤ワイン)に匹敵すると言われています。値段がグランクリュ第一級のマルゴの二、三倍もするからです。」

「こうした場合に実際に起きています。『ペトリュース』は畑が十一ヘクタールと小さいため希少価値を生んでいる点もあると思います」

「ワインの蘊蓄をお聞きしながら飲むと、一段とおいしくなりますね」

「ワインは同じでも収穫年のぶどうの出来によって左右されますので、何年の収穫(ヴィンテージ)がポイントだと言われています」

三人は坂上恵美のワイン話で盛り上がった。

(続)



プロフィール

著者：岡田清治(おかだせいじ)

一九四二年生まれ ジャーナリスト

(編集プロダクション・NET108

代表) 著書に『心の遺言』

『あなたは社員の全能力を

引き出せますか!』

『リヨンで見た虹』など多数

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。 FAX: 0569-347971 メール: takamitsu@akai-shinbun.net

